

「恵みと平安がありますように」ピリピ1：2-5 堀田修一 21・9・12

- I まず神の恵みを知る。「どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたの上にありますように」：2。祝祷をもって書き始める。獄中にいても！私なら「早く解放されるように祈って下さい」と最初に記すかもしれません。まず、単なる挨拶以上の祝祷をパウロは記します。パウロのメッセージの要約でもある。「恵みと平安」の順番には深い意味がある。神が与えられた御子イエスの私達の為の十字架の先行的恵みで神との和解が生まれ、神との平和、平安が生まれる。感謝！
1. 「私たちの父なる神」→天地万物の創造主なる偉大な神が、何と私達の「父なる神」となって下さる恵み！御子イエスを信じる私達を神の子どもとして下さる（ヨハネ1：12）。偉大な神が私達の父となられる。御父は、御自身の子どもとされた私達の事を片時も忘れず見守り愛される。※証し。「天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いもの（真に益となり必要なもの）を下さらないことがあります（マタイ7：11）。また、御子の姿に成長するように愛をもって訓練し育てて下さる（ヘブル12：5-11）。
 2. 「主イエス・キリスト」→「主」：原語「キュリオス」（語源「権力、権威」の意＝主人、所有者。旧約聖書に出て来る神である「主」。ヘブル語でヤハウエ（神と神の民との密接な関係、契約関係を示す。神の御名、ヤハウエ→由来「わたしはある」出エジプト記3：14、永遠の自存者、不変の絶対的存在、私達人間を救い、助け、祝福し、契約を守られる方）。主権者である神。真の神である支配者。
 3. 「と」→「父なる神」と「主イエス・キリスト」は同格と示す。御父と御子と御聖霊は、同等の神であり、かつ一体のお方。父と子と聖霊の三位一体の神は、同等であり、同質であり、一体、一つの神。
 4. 「恵み」。福音の中心。父なる神と主イエス・キリストは、恵みの与え主、恵みの神。「恵み」＝原語：カリス。好意、愛顧、寵愛、恵み、恩恵の意。恵みとは、行いへの報酬としてではなく、神の一方的な好意、賜物。主イエスが、十字架で私達の罪の償いを完全に完了させられたので、罪深い私達が、イエス様を救い主、主と信じる信仰のみによって与えられる神の救いの恵み。主を信じた時だけではなく、その後も与えられ続ける神の恵み。主を信じた時だけ恵みがあり、後は自分の力で生きるのではない。神の恵みで救われスタートし、神の恵みで信仰生活を続け、生涯の終わりに死を迎え恵みの主のもと、天国に行く。もしくは、再臨の恵みの主を迎える。恵みで始まり、恵みで支えられ、恵みの主に至る！何という神の行き届いた恵み！「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる」（哀歌3：22）

5. 「平安」。御父と御子は平安の与え主。平安、平和の神。「平安」＝原語：エイレーネー。平和、和睦、平安の意。「平安」の前に「恵み」が記されている事に意味がある。「平安」は、神の救いの恵みの結果として与えられるものだから。他の手紙もこの順序（「恵みと平安」）。この「平安」とは、ただ静止した状態の平安のことではなく、神の恵み（主の十字架）によって勝ち取られ、与えられた「平安、平和」。私達には、生まれながらに心に罪があり、争い、憎しみ、不和を持っている。しかし、それらの罪を背負い、主が十字架につけられたので、その主を信じる時、罪が赦され→まず

①神との「平和」、和解が与えられる。次に

②私達の心に真の「平安、平和」が与えられる。神が愛され赦された自分自身を自分でも受け入れる平和。神が赦された自分を自分でも赦していないと人を赦すのは難しい。神が赦されても自分を責め続ける事がある。神が愛し赦されている自分を自分でも自己受容できるように祈りたい。主が与えられる平安は、世が与える平安とは違う。世の平安は、うまくいっているからの平安。それは、何か一つの問題が起きると吹き飛んでしまう平安。しかし主は、私達がどのような状況にあろうとも真の平安を与えて下さる（ヨハネ14：27）。※証し。罪赦される平安、愛されている平安、すべての状況を神が支配しておられる事を認めることによる平安。今、皆さんの悩みは、神の御手の中にあり、神が支えて下さると神を信頼しましょう。

③主に罪を赦され、主の愛で人を赦し、人々の間に平和が生まれる。※証し：私が主と出会っていないならば？主の愛をいただいているならば？

6. 「から」→パウロ（人間）からではなく御父と主イエスから。「恵みと平安」が与えられる秘訣は、与え主なる神との正しい関係。主につながり、主にとどまり続ける事。

Ⅱ 神の恵みと平安、平和を受けた者、私達の応答。

1. 「私は、あなたがたのことを思うごとに私の神に感謝しています」：3。ピリピの教会には問題があった（この地上では問題のない教会はない）。しかしパウロは、最初に問題点の指摘ではなく、まず神の恵みに目を留めて神に感謝する。人々の良い所を評価し感謝する。→：5。私達もそうありたい。「感謝の心を持つ人になりなさい」（コロサイ3：15）。私は、成長の途上で不完全だが、出来るだけ、まず恵みを数え、神と人に感謝するように心がけている。神と人に感謝する時、不思議に自分の心も暖かくなる。喜びが増す。皆さんも、今日から実践してみてください。感謝する時、神の希望の光が見えて来る！

2. 「あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り」：4。パウロは獄中にいても、不平不満をもって過ごすのではなく、自分自身が御父と主イエスから恵みと平安を受け続け、感謝と喜びと愛をもって心からとりなしの祈りをしていた。獄中とピリピと場所は離れていても、主にあって互いのことを思いやり、祈り支え合うことはできた。私達もそばにいても離れていても祈り支え合うことができる。御父と主から恵みと平安があるように祈り合える。神はその祈りを聞かれ私達に実際に力を与え支えられる。私も足りない者ですが、聖書教会の皆さんの存在を喜び、祈っています。皆さんの愛と祈りの支えを感謝しつつ。

3. 「あなたがたが最初の日から今日まで（一時的だけではなく）、福音を伝えることにともに携わってきたこと（福音宣教のために苦楽を共にして来た）を感謝しています」：5。福音（私達の罪の為に十字架で死に復活された主を信じると救われるという良い知らせ）を信じて救われ、御父と主から恵みと平安を受けている者は、救われた最初から今日まで福音を広める事に参加する、支援する。自分が受けた福音、神の恵みの素晴らしさを自分だけではなく、家族、知人、友人、他の国の人々にも知って欲しいと願わされる。御父と主ご自身こそが、大きな愛といのちをかけて成就された救いの福音が、あらゆる人々に伝えられることを心から願い、喜んでおられる。「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます」Ⅰテモテ2：4。私達も、まず、神の恵みにあずかり、残された人生で、自分にできることから、祈りつつ素晴らしい救いの福音を広める事に参加ができますように。主が再び来られる日まで。私達が主のみもとに召される日まで。

①私達の分＝祈りつつ愛を示しつつ主を伝える。「聞いたことのない方をどのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか」ローマ10：14。結果は主に委ねて、祈りつつ愛を示しつつ、家族、知人、友人に主を伝えましょう。

②神の分＝人々の心を開き、主を信じる信仰を与え救われ成長させられる。結果は神に委ねつつ、祈りつつ愛を持って主を伝えましょう。「主は彼女の心を開いて、パウロの語る心を留めるようにされた」使徒16：14。「私（パウロ）が植えて（祈りつつ福音を伝え）、アポロが水を注ぎました（祈りつつ御言葉を教えた）。しかし、成長させたのは神です」Ⅰコリント3：6。主を伝えた後は、主が救われるように祈り続けましょう。主は、御心、最善のみわざをなしてくださいませ。